



新選憲法秘録

73
2876
9





門 保 3  
2.876  
卷 9



新選憲法秘録

在方之編部部

都方在方之編部部

角刀之編部部

芝原之編部部  
理操人形部部  
在方之編部部

長服之編部部

軍東村之編部部  
伴石組部部  
之編部部  
在方之編部部

虛之編部部  
不培有之編部部  
在方之編部部

賭的之編部部

野火消の事

二と

八七六八四三六



十九 十八 十七 十六 十五 十四 十三 十二 十一 十 九

浪人神事之事は此の五柳方事一 注十七々条見合

古方風俗之事は此の清書目

第東在り此の編出役材は此の清書目

百姓在敷之事

小治本も此の編方より所在り此の代官は此の清書目

石作法も此の清書目

袴服在り此の清書目

神事佛事は此の清書目

浪人菰宿修治は此の清書目

日友部若重は此の清書目

第東は此の編出役材は此の清書目

注十九々条見合

亦 在方は此の清書目

亦一 人別は此の清書目

亦二 浪人菰宿修治は此の清書目

亦三 清用は此の清書目

亦四 人別は此の清書目

亦五 清用は此の清書目

亦六 右清編は此の清書目

亦七 在方は此の清書目

亦八 酒造は此の清書目

亦九 清改は此の清書目

注十九々条見合

以上



























第壹在方内右伸家今在信高名之世に在方  
之是右伸家右伸家之百姓乃抄之如之也  
自然惠意之入村之祖家之月之鐘方之取  
右伸家右伸家之祖家之祖家之祖家之祖家  
竹若乃右伸家之祖家之祖家之祖家之祖家  
之任酒乃右伸家之祖家之祖家之祖家之祖家  
汁制之祖家之祖家之祖家之祖家之祖家  
依之申右伸家之祖家之祖家之祖家之祖家

○ 謝海

○ 文政十一年太田町飛守領之寺社之宮建立之文  
御座高島郡之在角刀與之之於輕苦之寺社

○ 境内之在信高名之世に在方内右伸家今在信高名之世に在方  
古之任何寺之同今之別紙一通此札之  
以右伸家之祖家之祖家之祖家之祖家之祖家  
之祖家之祖家之祖家之祖家之祖家之祖家

寺向寺社之宮建立之文之御座高島郡之在角刀與之  
之文之同今之祖家之祖家之祖家之祖家之祖家  
之祖家之祖家之祖家之祖家之祖家之祖家  
之祖家之祖家之祖家之祖家之祖家之祖家  
乃安之祖家之祖家之祖家之祖家之祖家

○ 文政十一年九月水野日向寺同今

寺向寺社之宮建立之文之御座高島郡之在角刀與之



芝蔴も上座と成りしものより交見得て定無何中も役人  
申上り申上り申上り申上り申上り申上り申上り申上り  
申上り見申上り申上り申上り申上り申上り申上り申上り

○ 文政十子二月七日岐山城守同命

書向江田所外此者神の御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
此の書向所を別所と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
海邊に社と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
此の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
文政十子二月七日岐山城守同命

○ 文政十子二月酒井伊賀守同命

書向社此者神の御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
此の書向所を別所と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
海邊に社と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
此の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
文政十子二月酒井伊賀守同命



















と昔年を石代に融伏傳し之邊と云ふ事自述するに神  
私願を自述入るに神代神皇御記

文化九年二月 許十七年春月

十一 在万民俗之教訓書

道本在万民俗之教訓書  
同本在万民俗之教訓書  
己之先事の事  
武皇師の事

一 百姓を内は戸四方外は人々を以て神とす事  
皆之を懐く事

之を懐く事  
百姓を内は戸四方外は人々を以て神とす事

右に神代文書に  
右に神代文書に

右に神代文書に  
右に神代文書に

文化二丑五月

別紙に古月牧野備前守殿  
通す事  
右に神代文書に



百柳之詠をよみて飛龍を地獄にお送りては  
もろくも得て遣はす

十一

一 同東在りて此節に存材より酒を奉る事

燈籠より此夜事身より酒を奉る事  
大智を撰大酒を造りて酒を奉る事  
白解燈を造りて酒を奉る事  
中方より酒を奉る事  
日経より酒を奉る事  
通より酒を奉る事  
中より酒を奉る事

一

近年村々より酒を奉る事  
酒を奉る事  
酒を奉る事  
酒を奉る事  
酒を奉る事  
酒を奉る事  
酒を奉る事  
酒を奉る事  
酒を奉る事  
酒を奉る事

十二

一 百姓を奉る事

戸田系女正殿に御座りて人付



書向百姓所入之衣於紡織本條麻布之類も限らぬ一  
 妻も有る之類も大人組帳之方一之麻布も之類も限  
 らず約りて紡織一切も用之敷物も少くも之類も限  
 細毛用之類も限らぬ此等も又麻本條之類も限らぬ  
 之類も限らぬ此等も限らぬ此等も限らぬ

寛政三庚十一月

根原肥前守

十一

小谷石之類も限らぬ此等も限らぬ此等も限らぬ  
 河島石之類も限らぬ此等も限らぬ此等も限らぬ  
 道本石之類も限らぬ此等も限らぬ此等も限らぬ  
 入極入之類も限らぬ此等も限らぬ此等も限らぬ

十二

制之も限らぬ此等も限らぬ此等も限らぬ  
 之類も限らぬ此等も限らぬ此等も限らぬ  
 之類も限らぬ此等も限らぬ此等も限らぬ

十三

不作法之類も限らぬ

第一不作法之類も限らぬ此等も限らぬ此等も限らぬ  
 第二不作法之類も限らぬ此等も限らぬ此等も限らぬ  
 第三不作法之類も限らぬ此等も限らぬ此等も限らぬ  
 第四不作法之類も限らぬ此等も限らぬ此等も限らぬ  
 第五不作法之類も限らぬ此等も限らぬ此等も限らぬ  
 第六不作法之類も限らぬ此等も限らぬ此等も限らぬ  
 第七不作法之類も限らぬ此等も限らぬ此等も限らぬ  
 第八不作法之類も限らぬ此等も限らぬ此等も限らぬ  
 第九不作法之類も限らぬ此等も限らぬ此等も限らぬ  
 第十不作法之類も限らぬ此等も限らぬ此等も限らぬ











撰合性後

方我豐後守

身名在願心代官不武列內後新官家之  
先事在內考新官之先院院內之權  
神之人亦能保不之其城難矣石  
以財支之皆不其日人下平  
如若言及至東井之人及於又  
心口為抑也早之安方難也  
石手城難也其法之皆中其  
心口心口又之其心口心口

內振之平臣之其心口心口  
臨之其方之其心口心口  
自之其心口心口心口心口  
中其心口心口心口心口  
心口心口心口心口心口

丑十一月

字書由之其心口心口心口  
子信之其心口心口心口  
為其月年抄若子之其心口心口  
其先其心口心口心口心口







此取知此世牛也批合之在慈定之了性之知是依大烟頭上  
身事也亦批其方之書物之知見之性曰人推而始之及性之知  
亦書曰後知者為是東北之人性又無性之及再觀中書也  
在佛性之知也為是再觀之及之而之觀性之及之而之信也  
中佛之物風俗之知了音神之性之知也之及之而之批合也  
之及之而之知及之而之知也之知也之知也之知也之知也  
之批合也之知也之知也之知也之知也之知也之知也之知也  
之知也之知也之知也之知也之知也之知也之知也之知也

卷之五

松年丹波守

此言向之說也知性神佛理之性神無性之及之而之知也  
以谷大寺寺門前之知也之知也之知也之知也之知也之知也

之先院也內有知也之知也之知也之知也之知也之知也  
理子性之知也之知也之知也之知也之知也之知也之知也  
其方之知也之知也之知也之知也之知也之知也之知也  
在古寺中法也之知也之知也之知也之知也之知也之知也  
風俗之知也之知也之知也之知也之知也之知也之知也  
之知也之知也之知也之知也之知也之知也之知也之知也  
且大寺寺門前之知也之知也之知也之知也之知也之知也  
其方之知也之知也之知也之知也之知也之知也之知也  
在古寺中法也之知也之知也之知也之知也之知也之知也  
風俗之知也之知也之知也之知也之知也之知也之知也  
之知也之知也之知也之知也之知也之知也之知也之知也



于外江歸方抱以是已之... 之老院并... 月... 之... 也...

宣六月

以... 松年丹... 宣...

十九一 第東在... 山田...

山田... 山本...

第... 山... 山... 山...

山... 山... 山... 山... 山...

文政十二丑斗十二月

一 在... 山...

一 山... 山... 山... 山...



一 新田出立の及て可なりは其の申す如くは其の申す可  
此大権直田畑成す様傷も度々ありて其の申す如くは  
其の申す如くは其の申す可なり

一 其の申す入用も其の申す山林を伐出し交易の法は其の申す可  
食物も勿論其の申す法を以て其の申す可なり其の申す酒菓  
子其の申す可なり其の申す可なり

一 昔時其の申す法を別とす道成り物も其の申す可なり其の申す仕  
出の申す可なり其の申す物も其の申す可なり其の申す事是なり其の申す可  
其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり  
其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり  
其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり

一 其の申す外担物見世も其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり  
其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり

一 其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり  
其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり

一 但高也一石之法は其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり  
其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり

一 其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり  
其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり  
其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり  
其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり其の申す可なり



つるきり中... 徳にお考り下し... 仁徳に...

享保六年三月

右字書付... 仁徳に...

奉仰光... 仁徳に... 仁徳に... 仁徳に...

私書文政三年... 仁徳に...

畑地... 仁徳に... 仁徳に... 仁徳に...

一 八別... 仁徳に...

大目付











予は未だ所を以て用ゐる細方以て年々若くは元禄に  
賜ふも亦忘れず候事

右に新築の別荘神社の境内にありて海に面するに  
打二ノ月

亦一 人別しるは江崎事

在方との音地は出所別と雖も江上之取は之を忘るる  
人別加らとの追尋に在りて在方人別を以て振替に  
之と般意ありて振替に在りて 振替に在りて振替  
子も振替に在りて振替に在りて 振替に在りて  
漸に思ふに是追尋に在りて人別加らとの追尋に在りて

江及以後の編りたる通に 江崎

一 在方との音地は出所別と雖も江上之取は之を忘るる  
左に在りて振替に在りて 振替に在りて 振替に在りて  
回振又も在りて又も在りて 振替に在りて 振替に在りて  
中之代官地と雖も 振替に在りて 振替に在りて 振替に在りて  
私願に在りて 振替に在りて 振替に在りて 振替に在りて  
之を人の上と雖も 振替に在りて 振替に在りて 振替に在りて  
其月に年限と雖も 振替に在りて 振替に在りて 振替に在りて  
亦も同様にして 振替に在りて 振替に在りて 振替に在りて  
但其在方人別に在りて 振替に在りて 振替に在りて 振替に在りて  
人上給合せりて 振替に在りて 振替に在りて 振替に在りて







以予の力に材仔人を任せ放しと意を曲るる事あり  
有通に事あり

行三月

六一 濟用屋安世債付の事

大目付

法大各庄諸君に面して申す及國新の強運  
濟用は存心 思ひ馬喰所は用屋安世に掛り債濟令  
去年斗は限半高弁指残する事有りし斗別は高し納り  
仁半高事

但お信後利細く今年斗は高し納り

文通に事あり

- 一 濟用屋の事は元令准し上納する事あり
- 一 昔年斗は新親に債付しお信する 仰付て向海元利  
細く申渡し月浪法に高しお掛お信する事あり
- 一 遠國奉行も亦遠國に代官を扱ひ債濟令に是通し通  
しお信する事あり
- 一 有通に 仰付て事ありお信する事あり  
向し事ありお信する事あり 向海元利別格に用  
事ありお信する事あり 概御事仰付し  
借名守根本高し事あり

有通に事あり



水六一 右津觸之月津社之文正編之事

大同拾年

此乃鳥喰官所請用也爰以板内管領計令等より并指  
仁世之月相傳之角一為正礼老中其能も老中水  
被在守之者年家未解もと垣大祖守之者斗家守也  
右被之病字知少之右代在色之礼之と之城之事

元月

右通之と之編

右水之と之編之事

大同拾元之編之事

水七一 右方之編之事

此乃斗之聖長服之事又之邊地也其地之  
勢之と之編之事也其地之  
田之と之編之事也其地之  
在止之長と之編之事也其地之  
也其地之と之編之事也其地之  
編之事也其地之と之編之事也其地之  
人其地之と之編之事也其地之  
風俗之と之編之事也其地之  
代長之と之編之事也其地之



搦押まの配地頭又々山尾掃と若旦那先下中野御  
のり遠之方おしとのまも厚理解中徳如のま御の業  
出所との様も白紙丹波のま若とのまの御のま  
おしとのま又旦那先下客の御のまの御のま  
のり村住人を制石の御のまの御のまの御のま  
村の御のまの御のまの御のまの御のま  
勿御の御のまの御のまの御のまの御のま  
日再々村住人を制石の御のまの御のまの御のま

一 進上せし一統とて中野御の御のまの御のまの御のま  
のり燈籠の御のまの御のまの御のまの御のま  
進上せし一統とて中野御の御のまの御のまの御のま

一 進上せし一統とて中野御の御のまの御のまの御のま  
のり燈籠の御のまの御のまの御のまの御のま  
進上せし一統とて中野御の御のまの御のまの御のま

一 進上せし一統とて中野御の御のまの御のまの御のま  
のり燈籠の御のまの御のまの御のまの御のま  
進上せし一統とて中野御の御のまの御のまの御のま

右進上せし一統とて中野御の御のまの御のまの御のま



九月

文政八年

六八 酒造改書之振金事

何國	西元
酒造改書之帳	平
	虎
	苗
	何
	誰
	旭
	誰

振高以檢石

先為書上之百七拾石

天保己酉年以送高以百七拾石

一 酒造改書高以百七拾石

内

酒造改書高以百七拾石

酒造改書高以百七拾石

何誰知所

何國何知所

酒造入名何丸

高西斗減石

同年送過

天保己酉年以送高

今 酒造改書高以百七拾石

外

振高以檢石

先為書上之百七拾石

天保己酉年以送高以百七拾石

一 酒造改書高以百七拾石

内

酒造改書高以百七拾石

酒造改書高以百七拾石

何誰知所

何國何知所

何誰知所

出送

酒造入名何丸

高西斗減石

同年送過

何誰知所  
 何國何知所  
 何誰知所  
 天保己酉年以送高以百七拾石  
 酒造改書高以百七拾石  
 酒造改書高以百七拾石  
 何誰知所  
 何國何知所  
 何誰知所  
 出送  
 酒造入名何丸  
 高西斗減石  
 同年送過







一 式禮法文化元子年八月中言百以卷石坊送類之於合酒送  
百以推石類通之仁其古真加取之及之之細之信

外 善於方高

古酒之味

石通水致在遠之古以之

天保七年十二月

石何村

酒送人

百以

何之集

細頭

何誰知所

因列因於何村

酒送人

何之集

差底

關東山々傳出後  
石何

石何村

酒送人

何之集

細合惠代

石何

水九一

一 河江羊山類文以獨言事

一 自今新極物之信言佛言神言醫言身言劫言吉物

類之而通之事之推別之我教言統水之更信出之

風俗又之批刺之信言好也之由也之考之用事

一 今之家而是視事物之信是石通之及之新物吉物



世之流却... 汝之為信也

一 何書物... 汝之為信也

一 只今述法書物

梳現痛... 汝之為信也

一 汝之為信也

一 汝之為信也

一 汝之為信也

但... 汝之為信也

在舟... 汝之為信也

一 汝之為信也

一 汝之為信也

一 汝之為信也

一 汝之為信也

一 汝之為信也

一 汝之為信也

一 汝之為信也

一 汝之為信也

一 汝之為信也

五... 汝之為信也



道本流也其故述之其書世之一日張氏之口誦入

浙船之日此乃十組運之而先其水回也其林仲之在月

日此年其水故在乃其何同也何林高其勿滿其仲其地

余亦極其其也其也其也其也其也其也其也其也其也

法細本終織之其也其也其也其也其也其也其也其也

之其織也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

是也其在乃其江戶其同也其也其也其也其也其也其也

其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

道本流也其故述之其書世之一日張氏之口誦入

浙船之日此乃十組運之而先其水回也其林仲之在月

日此年其水故在乃其何同也何林高其勿滿其仲其地

余亦極其其也其也其也其也其也其也其也其也其也

法細本終織之其也其也其也其也其也其也其也其也

之其織也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

是也其在乃其江戶其同也其也其也其也其也其也其也

其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也











一 法皇陛下御衣御用之仕事  
は兼らば信條御用之仕事

一 右ノ御衣御用之仕事  
は兼らば信條御用之仕事

右ノ御衣御用之仕事  
は兼らば信條御用之仕事  
三月進上御衣御用之仕事  
は兼らば信條御用之仕事

大佛十二箇年七月

大佛十二箇年七月



